

# ヨーガ行法における正しい行為 (satkāra) について

山 本 和 彦

## 一 はじめに

四世紀頃に成立した『ヨーガ・スートラ』(Yogasūtra)の第一章第一四経はヨーガ実修を簡潔に表現しており、学派を問わず後の時代まで頻繁に引用されている経文である。十世紀のヴァイシェーシカ学派 (Vaiśeṣika) の『ニヤーヤ・カンダリー』(Nyāyakandali)<sup>(1)</sup>、十一世紀のジャイナ教 (Jaina) の『プラマーナ・シーマーンサー』(Pramāṇamīmāṃsā)<sup>(2)</sup>、十一世紀頃のヴァイシェーシカ学派の『キラナーヴァリー』(Kiraṇāvālī)<sup>(3)</sup>、十四世紀の新ニヤーヤ (Nyāyāyāya) 学派の『タットヴァ・チンターマニ』(Tattvacintāmaṇi)<sup>(4)</sup> などがそうである。『ヨーガ・スートラ』一・一四のなかに「正しい行為」(satkāra) という言葉がある。この言葉はさまざまに現代語訳されており、定訳がない。サンスクリットの sat は動詞語根 ṣ (存在する) の現在分詞であり、本来の意味は「存在している」であり、それから派生して「実在する」、「真実の」、「よこ」、「高貴な」、「正しい」、「尊敬できる」、「賢明な」、「美しい」、「堅固な」などの意味がある。<sup>(5)</sup> 「正しい (sat) 行為 (kāra)」は直訳であり、モニエル梵英辞典ではヨーガの専門用語として、<sup>(6)</sup> “care” (注意、気をつける)、“attention” (注意、配慮)、“consideration of or regard for a thing” (物事を考慮する、配慮する) と記載されている。<sup>(7)</sup> 『ヨーガ・スートラ』一・一四と引用文のなかでの現代語訳として「専念して」、「<sup>(8)</sup> 厳格に」

「真摯<sup>(9)</sup>に」、「大いなる真剣をもって」、「戒慎<sup>(11)</sup>して」、「慎重<sup>(12)</sup>に」、「弛みなく（努力すると）」、「注意深く<sup>(14)</sup>」、「献身的に<sup>(15)</sup>」、「with earnestness<sup>(16)</sup>」、「with earnest attention<sup>(17)</sup>」、「with devotion<sup>(18)</sup>」などがある。一世紀頃成立した『バガヴァッド・ギーター』(Bhagavadgītā) 一七・一八では一般的な意味で使われており、「接待<sup>(19)</sup>」や「己への厚遇<sup>(20)</sup>」と和訳されている。『マハーバータ』のなかでは「もてなし<sup>(21)</sup>」の意味で用いられている場合が多くあり、心を込めた行為を指している。本稿ではヨーガ行法のなかでのこの言葉の意味する内容について検討する。

## 二 ヨーガ実修

ヨーガ実修に関する『ヨーガ・スートラ』一・一二から一六までの文章は次の通りである。

- 〔一・一二〕 実修と離欲とによって、それ（心作用）の止滅<sup>(22)</sup>がある。
- 〔一・一三〕 それ（心作用の止滅）を持続させる努力が実修<sup>(23)</sup>である。
- 〔一・一四〕 それ（ヨーガ）は、長期間絶え間なく正しい行為（sādhāra）とともに実修<sup>(24)</sup>されると、堅固な基盤ができる。
- 〔一・一五〕 離欲とは、知覚や聞く対象に欲望がない人の克服者としての意識<sup>(25)</sup>である。
- 〔一・一六〕 最高のそれ（離欲）は、精神原理の〔純質との識別<sup>(26)</sup>〕知を持つ人が、〔純質、激質、暗質という三〕徳に対する欲望を離れることである<sup>(27)</sup>。

ヨーガの手段は実修（abhyāsa）と離欲（vairāgya）である。そして、心作用の止滅に対する努力（yātna）が実修である。ヨーガの実修は長期間絶え間なく行われなければならない。「正しい行為」について、『ヨーガ・スートラ』

一・一四に対する六世紀頃の註釈書『ヨーガ・バーシュヤ』(Yogabhāṣya) は次のように説明する。

「ヨーガとは」長期間の実修、絶え間のない実修、正しい行為をとまなう実修である。苦行、梵行、知識、信心をとまなうて履行された正しい行為を持つものであり、堅固な基盤ができる。<sup>(28)</sup>

「」では苦行 (tapas)、梵行 (brahmacharya)、知識 (vidya)、信心 (śraddha) をとまなう履行 (sāmpādita) が正しい行為 (sātkāra) であると註釈されている。

『ヨーガ・スートラ』以前の紀元前後に成立した『プラシュナ・ウパニシャッド』(Prasna Upaniṣad) 一・十では次のように言われている。

苦行、梵行、信心、知識などによってアートマンを探求する者は、北行によって太陽に生まれる。<sup>(29)</sup>

ここでは解脱の手段として苦行 (tapas)、梵行 (brahmacharya)、信心 (śraddha)、知識 (vidya) があげられており、『ヨーガ・スートラ』一・一四に対する『ヨーガ・バーシュヤ』の註釈のなかであげられている苦行、梵行、知識、信心という四種類の履行と一致している。

その他、ヨーガの手段として『ヨーガ・スートラ』のなかでは努力 (vīrya)<sup>(30)</sup>、念想 (smṛti)<sup>(31)</sup>、三昧 (samādhi)<sup>(32)</sup>、智慧 (prajña)<sup>(33)</sup>、自在神祈念、読誦 (svādhyāya)<sup>(35)</sup>、識別知 (vivekākhyāti)<sup>(36)</sup> などがあげられている。

十六、七世紀頃の『ハタヨーガ・プラディーピーカー』(Hathayogapradīpikā) ではヨーガの完成の手段は以下のように述べられている。

〔一・一六〕 勇気、気力、堅固、真理知、決心、人との交際の放棄の六つによってヨーガは完成する。<sup>(37)</sup>

〔一・四二〕 アートマンを瞑想し、節食し、十二年間常に達人体位を実修すると、ヨーガ行者は成就を得（解脱す）るだろう。<sup>(38)</sup>

〔一・五九〕 さて、ナード音に意識を集中させるのがハタ（ヨーガ）のなかでの実修順序である。梵行し、節食し、「欲望を」放棄し、ヨーガを最高の目的とする者は、一年後に〔ヨーガの〕完成者になるだろう。これに対して疑いはない。<sup>(39)</sup>

『ヨーガ・バーシユヤ』であげられる履行のなかでは、ここでの梵行 (brahmacharya) が一致し、知識 (vidya) は、<sup>(40)</sup>ここでの真理知 (tattvajñāna) に相当する。

その他、解脱が結果となるヨーガの手段として『ハタヨーガ・プラディーピカー』のなかでは眉間に意識を集中させる観想<sup>(41)</sup>、内部の音を聞くナード観想などがあげられている。

『ハタヨーガ・プラディーピカー』以降に成立した『ゲールンダ・サンヒター』(Gherandasamhita) のなかでは達人 (siddha) の体位 (asana)<sup>(42)</sup>、胃引き上げ (uddiyāna) の体位<sup>(43)</sup>、胎宮 (yonī) の印相 (mudrā)<sup>(44)</sup>、金剛 (vajronī) の印相<sup>(45)</sup>、虚空凝念 (ākāśidhāraṇa) の印相<sup>(46)</sup>、雄蜂の調気 (bhrāmarikumbhaka)<sup>(47)</sup>、静慮 (dhyāna) のヨーガ<sup>(48)</sup>、三昧 (samādhi) のヨーガ<sup>(49)</sup> などである。

『ゲールンダ・サンヒター』以降に成立した『シヴァ・サンヒター』(Śivasamhita) のなかでは調気 (prāṇāyama) の完成 (nispatti) の境地 (avasthā)<sup>(50)</sup>、達人 (siddha) の坐 (āsana)<sup>(51)</sup>、蓮華 (padma) の坐<sup>(52)</sup>、会陰 (yonī) の印相 (mudrā)<sup>(53)</sup>、似像 (pratīka) の観想 (upāsana)<sup>(54)</sup>、眉間 (ajñā) 蓮華 (padma) の静慮 (dhyāna)<sup>(55)</sup>、頸動脈 (susumā) の念想 (smaraṇa)<sup>(56)</sup>、王 (rāja) のヨーガとしての絶え間のない (mirantara) 静慮<sup>(57)</sup>、王のなかの王 (rājādhirāja) のヨーガ<sup>(58)</sup>、真言 (mantra)<sup>(59)</sup>、ヨー

ガ行の規定 (vidhāna) に従うなどである。<sup>(60)</sup>

### 三 ヨーガ実修の準備

『ヨーガ・スートラ』によれば、ヨーガには禁戒 (yama) 、勸戒 (niyama) 、坐法 (āsana) 、調気法 (prāṇāyāna) 、制感 (pratyāhara) 、凝念 (dhāraṇa) 、静慮 (dhyāna) 、三昧 (samādhi) という八階梯 (aṣṭāṅga) の実修があるが、『ヨーガ・バーシュヤ』で述べられる「正しい行為」の内容である梵行 (brahmacarya) は禁戒のひとつであり、苦行は勸戒のひとつであり、両方ともヨーガの準備段階である。

ヨーガの八階梯のうち最初の五つは外的支分 (bahiraṅga) であり、準備段階である。凝念以降の三つは内的支分 (antaraṅga) であり、ヨーガ実修である。この準備のうち坐法、調気法、制感、三昧はヨーガ実修と同時に行うものである。ヨーガ実修以前に完了しておく必要がある準備は、不殺生 (ahiṃsā) 、正直 (satya) 、不盗 (asteya) 、梵行 (brahmacharya) 、不貪 (aparigraha) の五つの禁戒と清浄 (sauca) 、知足 (santosā) 、苦行 (tapas) 、読誦 (svādhyāya) 、自在神祈念 (īśvarapranidhāna) の五つの戒勸<sup>(62)</sup>である。ヨーガ実修中だけ不殺生や正直などの戒を守るのではなく、それ以前の何年間にもわたって禁戒、勸戒を守り続けねばならない。

『ハタヨーガ・プラディーピカ』での禁戒は不殺生 (ahiṃsā)<sup>(63)</sup>、正直 (satya) 、不盗 (asteya) 、梵行 (brahmacharya) 、忍耐 (kṣama) 、堅固 (dhṛti) 、慈悲 (daya) 、真摯 (āriṇya) 、節食 (mitāhara) 、清浄 (sauca) であり、勸戒は苦行 (tapas) 、知足 (santosā) 、神信仰 (astikya) 、布施 (dāna) 、自在神供養 (īśvarapūjāna) 、定説文聴聞 (siddhantavākyaśravaṇa) 、慚愧 (hrī) 、知性 (matu) 、念誦 (japa)<sup>(64)</sup>、献供 (huta) である。

『シヴァ・サンヒター』で避けるべきものは、避けるべき<sup>(65)</sup>とは酸味のあるもの (amla) 、乾燥したもの (rukṣa) 、刺激のあるもの (tikṣṇa) 、塩気のあるもの (lavana) 、からし由来のもの (sārsapa) 、苦いもの (kaṭu) 、過多の徘徊 (bahu-

lam bhraṇaṇam) 早朝の沐浴 (prāṭhasnana) 油で揚げたもの (tallavidāhaka) 盗み (steya) 殺生 (himsa) 人を嫌う  
 こと (janadvesa) 自我意識 (ahankāra) 不誠実 (anāritva) 断食 (upavāsa) 不正直 (asatya) 不解脱 (amokṣa) 生  
 物を傷つける (prāṇipīḍana) 女性との交際 (strisaṅga) 火を使う仕事 (agniseva) しゃべり過ぎ (bahvālāpa) 好き  
 嫌い (prīṭhāpriya) 過食 (atīvabhojana) であり、勸戒として用いるべき、実行すべきは牛酪 (ghṛta) 牛乳 (ksīra) 美  
 味しい料理 (miṣṭāna) 石灰拔きのキンブ (tāmbūḍiṇ cūrṇavarjita) 樟腦 (karpura) 脱穀した穀物 (niṣṭuṣa) 小  
 な入口の快適な小屋 (miṣṭāṇa sumahāṇa sūkṣmarandhrakam) 定説の聴聞 (śiḍhāntasravaṇa) 常に離欲で家事に従事  
 すること (nityaṇ vairāgyaghaṣevanaṇa) ヴィシュヌの名を唱えること (nāmasaṅkīrtanaṇa viśṇoḥ) 美しい音を聞くこ  
 と (suṇadāśravaṇa) 堅固 (dhṛti) 忍耐 (kṣama) 苦行 (tapas) 清浄 (śauca) 慚愧 (hri) 知性 (matī) 師に仕える  
 こと (guruṣevana) である。

## 四 ま と め

ヨーガ行法の手段は実修と離欲である。実修とは心作用の滅に対する努力であり、離欲は精神原理 (puruṣa) と物  
 質原理 (prakṛti) とが異なることを知ることより可能となる。ヨーガ実修には長期間の準備が必要であり、それは禁  
 戒と勸戒であった。さらに実修も一回きりではなく、長期間に何回も行う必要がある。たとえば『ハタヨーガ・プ  
 ラディーピカー』一・四二によれば十二年間と言われている。『ヨーガ・スートラ』一・一四の「正しい行為」  
 (sātkaṛa) はしっかりと、きつちりと、確実に行うという意味であり、その内容はヨーガ行の準備と実修、特に準備  
 である。モニエル梵英辞典で記載されているようなヨーガの専門用語と見なす必要はなく、一般的な意味で解釈でき  
 る。ヨーガ実修の前には数年間、禁戒と勸戒をしつかりと守り、その上で実修を行わないと効果はない。

註

- (1) Nyāyakandali 633<sup>16-17</sup>; dirghakāladarānairantarayasevitaḥvānāhītaḥviśadabhāvam ātmajāñānam eva rāga dveṣau mohān ca samulākāṣaṇ kaṣadvihiṭākaraṇanimittaṇ pratyavāyaṇ api kaṣaṭi tad ayuktam | 「長期間の努力をともない絶え間なく実修された瞑想によって生じた明瞭なアトマンの知識こそが、欲望、憎しみ、無知を根本から破壊し、規定を実行しない」ことを原因とする過失（業）で破壊する」といふこれ（の考え）は正しくない」。
- (2) Pramāṇamīmāṃsāvṛtti: 10<sup>15-16</sup> ad Pramāṇamīmāṃsā 1.14; dirghakālanirantarasaṭkāṛasevitaratrayaprakarsaparyante... 「長期間絶え間なく正しい行為とともに実修された三寶の究極に……」。長崎一九八八、二二二頁参照。
- (3) Kiranāvali: 34<sup>31</sup>-35<sup>1</sup>; dirghakāladarānairantarayasevitaṇ nivyitlakṣaṇād dharmād eva tattvajñānaṇ upadyate | 「長期間努力をともなう絶え間のない実修から生じた、滅という特徴を持つダルマからのみ真理知は生起する」。Cf. Tachikawa 2001, 山本二〇一五、三九頁参照。
- (4) Tattvachintāmaṇi: 2074<sup>1-2</sup>; ciraṇirantarādarasevitanidhyāsanañāyayogaḍdharmād ... | 「長期間絶え間なく努力をともなう実修から生じた（ダルマ）、瞑想によって生じた（ダルマ）、ヨーガによって生じたダルマからの……」。山本二〇一五、一七八頁参照。
- (5) V.S. Apte, *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, Poona, 1890, repr. Rinsen Book Co., 1978, 1611.
- (6) Sir Monier Monier-Williams, *A Sanskrit-English Dictionary*, Oxford, 1899, repr. 1982, 1134. 下の英訳は「スッタニパータ」で頻出する sata を連想させる。sata は動詞語根 sar（サンスクリットでは smṛ「思い出す」）の過去分詞であり、「思い出された、考えられた」という意味である。「スッタニパータ」768では「欲望を避ける人は、蛇の頭を足で（踏むのを）避けるように、その人は世間で思い出して（sata）執着を乗り越える」と言われている。ここでは蛇を足で踏むと噛まれるという過去の経験を「思い出す」、執着は避けるべきものであることを「思い出す」という例であり、そこから「よく気をつけて」（中村一九八四、一七四頁）、「自覚しつつけて」（荒牧二〇一五、二〇三頁）、「よく気づき」（石飛二〇一六、四五頁）と意訳されている。しかし、サンスクリットの saṭ に「思い出す」という意味はない。
- (7) 松尾一九六九、二二二頁
- (8) 佐保田一九七三、七一頁

- (9) ヴィディヤーランカール二〇一四、一七一頁
- (10) サッチダーナンダ一九八九、四九頁
- (11) 中村一九九六、一二五頁
- (12) 長崎一九八八、二二二頁
- (13) 番場二〇〇八、一七二頁
- (14) 本多二〇〇七a、八三頁
- (15) 本多二〇〇七b、四八頁
- (16) Baba 1976: 7.
- (17) Woods 1914: 35; Krishnan 1996: 147.
- (18) Rukmani 1981: 95; 2001: 77.
- (19) 上村一九九二、一二八頁
- (20) 鎧一九九八、一七五頁
- (21) तान्नेह Mahābhārata 3.50.7; 3.58.9-10; 3.58.18<sup>タネ</sup>。上村二〇〇一、一三七頁、一五六―七頁参照。
- (22) abhyāsavairāgyābhyām tannirodhaḥ ||
- (23) tatra sthītau yato 'bhyāsaḥ ||
- (24) sa tu dirghakālanairantaryasatkārāsevito dīrghabhūmiḥ ||
- (25) dṛṣṭānśrāvakavisayavitrāṣṇasya vāsīkārasaṃjñā vairāgyam ||
- (26) Cf. Yogasūtra 3.49: sattvapuruṣaṇyaratkhyātīmātrasya ... || 「純質と精神原理とは別であるという知のみが……」。
- (27) taparam puruṣakhyāter guṇavairāṣṇyam || Cf. Yogasūtra 2.17: dṛṣṭīrāśrayoḥ saṃyogo heyahetuḥ || 「見る主体と見られる対象との結合が、捨てられるべきもの(苦)の原因である」。見る主体は精神原理(puruṣa)であり、見られる対象は物質原理(prakṛti)である。苦の原因は、物質原理のなかの覚(buddhi)の純質(sattva)である。純質は、さらに激質(rajas)・暗質(tamas)とから成る三徳(guṇa)の一つである。佐保田一九七三、九三―九五頁参照。
- (28) dirghakālēsevito nīrantarāsevitaḥ satkāṛāsevitaḥ | tapasā brahmacyeṇa vidyayā śradhaya ca sampāditaḥ satkāravān



dr̥dhahumir bhavati |

- (29) Prāśnopaniṣad 1.10: athottarena tapasā brahmacariyeṇa śraddhā vidyātmānam anviśyādityam abhiṣayante |  
(30) 1.20.  
(31) 1.20.  
(32) 1.20.  
(33) 1.20, 2.27, 3.5.  
(34) 1.23, 2.1, 2.45.  
(35) 2.1.  
(36) 2.26.  
(37) usāhāt sāhasād dhvairyāt tattvajñānāc ca niścayāt | janasaṃgaparit̥yāgāt śaḍbhir yogaḥ prasiddhyati ||  
(38) ātmadhyāyī mitāhārī yāvad dvādsavatsaram | sadā siddhasanābhyaśād yogī nīṣpattim āpnuyāt || 佐保田 | 九  
ヤ | 三 | ヲ | 七  
1.40.  
(39) atha nādanusaṃdhānam abhyāsānukramo haṭhe | brahmacarī mitāhārī tyāgi yogaparāyaṇaḥ | abdaś ūrdhvaṃbhavet  
siddho nātra kāryā vicāraṇā || 佐保田 | 九  
ヤ | 三 | ヲ | 七  
(40) 4.79 (佐保田 | 九  
ヤ | 三 | ヲ | 七  
4.80)  
(41) 4.79-101 (佐保田 | 九  
七 | 三 | ヲ | 七  
4.80-102)  
(42) 2.7.  
(43) 3.10, 11.  
(44) 3.37-44.  
(45) 3.45-48.  
(46) 3.80.  
(47) 5.78-82. なお5.78では内的調気 (pūrakakunibhaka) と言われている。内的調気に関しては、佐保田一九七三、一一一  
一一頁、二一七―二一八頁参照。

- (48) 6.1-22.
- (49) 7.1-23.
- (50) 3.66, 67 (佐保田一九七八では3.79-81)
- (51) 3.85-87 (佐保田一九七八では3.99-103)
- (52) 3.88-91 (佐保田一九七八では3.104-109)
- (53) 4.1-9 (佐保田一九七八では4.1-16)
- (54) 5.15-21 (佐保田一九七八では5.32-38)
- (55) 5.1.11, 1.16-1.19 (佐保田一九七八では5.148, 154-158)
- (56) 5.124, 125 (佐保田一九七八では5.163, 164)。<sup>レ</sup>「<sup>レ</sup>サマ<sup>レ</sup>の念想 (smarana) は静慮 (dhyāna) と同<sup>レ</sup>」。
- (57) 5.156, 157 (佐保田一九七八では5.201-203)
- (58) 5.169-174 (佐保田一九七八では5.215-222)
- (59) 5.204 (佐保田一九七八では5.257-259)
- (60) 5.210 (佐保田一九七八では5.265-266)。<sup>レ</sup>規定に従う人として、知足の人 (santuṣṭa) や執着のない人 (asaṅkta) があげられ<sup>レ</sup>る。
- (61) Yogasūtra 2.31.
- (62) Ygasūtra 2.32.
- (63) Hathayogapradīpikā 1.17 (佐保田一九七三では1.16補説)
- (64) Haṭhāyogapradīpikā 1.18 (佐保田一九七三では1.16補説)
- (65) テキストは“tapo”となっているが、佐保田一九七三:174 (「マントラ念誦」に従い“japo”と読む。苦行 (tapas) は既出。
- (66) Śivasamhitā 3.33 (佐保田一九七八では3.36-38)。佐保田では「捨て去るべきもの」は禁戒 (yama) と考えられている。
- (67) Śivasamhitā 3.35 (佐保田一九七八では3.40-42)

## 参考文献

### 第一次資料

Bhagavadgītā

*The Mahābhārata: the Bhishmaparvan, being the Sixth Book of the Mahābhārata, the Great Epic of India*, vol. 7, Ed. S. K. Belvalkar, Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1947.

Gheranda Saṁhitā of Gheranda

*The Gheranda Saṁhitā*. Translated in English by Rai Bahadur Srisa Chandra Vasu, Sacred Books of the Hindus, v. 15, pt. 2, Allahabad: Pāṇini Office, 1914.

Haṭhayogapradīpikā of Svātmārāma

*The Haṭha Yoga Pradīpikā*. Translation into English by Pancham Sinh, 1915.

Kiraṇāvali of Udayan Ācārya

*Kiraṇāvalīrahasyam of M. M. Mathurānātha Tarkavāgiśā*. Ed. Gaurinātha Śāstrī, M. M. Śivakumārāśāstrī Granthamālā Vol. 4, Varanasi: Sampurnanand Sanskrit Vishvavidyalaya, 1981.

Nyāyakandall of Śrīdhara

*Nyāyakandallī being a Commentary on Prāśastipādabhaṣya with Three Sub-commentaries*. Ed. J. S. Jellū and V. G. Parikh, Gaekwad's Oriental Series No. 174, Baroda: Oriental Institute, 1991.

Pramāṇanimāṃsā of Hemacandra

*Pramāṇanimāṃsā of Kalkāla Sarvajña Śrī Hemacandraācārya with Bhaṣā Tīppana of Pandita Subhālajī Sanghvi*. Ed. Pandita Subhālajī Sanghavi, Pt. Mahendra Kumar Nyāyaśāstrī, Pt. Dalsukha Malvaniya Nyāyavīrtta, Ahmedabad: Saraswati Pustak Bhandar, 1998.

Pramāṇanimāṃsāvṛtti of Hemacandra

See Prāmāṇanimāṃsā.

Prāśna Upaniṣad

*The Early Upanisads: Annotated Text and Translation.* Ed. Patrick Olivelle. New York & Oxford: Oxford University Press, 1998. 458–471.

Śivasanhitā

*The Siva Samhitā.* Translated by Rai Bahadur Srisa Chandra Vasu. Sacred Books of the Hindus, v. 15, pt. 1. Allahabad: Paṇini Office, 1914.

Suttanipāṭa

*Sutta-Nipāṭa.* New Edition by Dines Andersen and Helmer Smith. Pali Text Society, 1913.

Tattvacintāmaṇi of Gaṇgeśa Upādhyāya

*Gaḍādhara: A Commentary on Dīdhiti the Commentary by Raghunātha Śrīraṇi on the Tattvacintāmaṇi of Śrī Gaṇgeśa Upādhyāya.* Ed. V. P. Divedin et al., Chowkhamba Sanskrit Series 42, Benares, 1913–27: 2055–2083, 2<sup>nd</sup> ed. by K. Jha and S. Vangiya, Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office, 1970.

Yogabhāṣya of Vyāsa

*Pātāñjalayogasūtrāṇi.* Ed. Kāśinātha Śāstri Āgāse Ānadāśrama Saṃskṛta Granthāvaliṇ 47, Poona: Ānadāśrama-mudraṇālaya, 1904.

Yogasūtra of Patañjali

See Yogabhāṣya

## 第二次資料

荒牧典俊・本庄良文・榎本文雄訳

二〇一五『スッタニパータ』[釈尊のことば] 全現代語訳』講談社学術文庫（初版一九八六）

石飛道子

二〇一六『スッタニパータ』と大乘への道』サンガ

A・ヴィディヤランカール

二〇一四『ヨーガ・スートラ…パタンジャリ哲学の精髓 原典・全訳・注釈付』東方出版  
上村勝彦訳

一九九二『バガヴァッド・ギーター』岩波文庫

二〇〇二『原典訳マハーバーラタ3』ちくま学芸文庫

佐保田鶴治

一九七三『ヨーガ根本教典』平河出版社

一九七八『続・ヨーガ根本教典』平河出版社

スワミ・サッチダーナナンダ

一九八九『インテグラル・ヨーガ…パタンジャリのヨーガ・スートラ』めるくまーる

辻直四郎

一九八〇『バガヴァッド・ギーター』講談社

長崎法潤

一九八八『ジャイナ認識論の研究』平楽寺書店

中村元

一九八四『ブッダのことば』岩波文庫

一九九六『ヨーガとサーンキヤの思想』『中村元選集「決定版」』第24巻、春秋社

番場裕之

二〇〇八『実践「ヨーガ・スートラ」入門』春秋社

本多恵

二〇〇七a『ヨーガ経註』上巻、平楽寺書店

二〇〇七b『ヨーガ経註』下巻、平楽寺書店

松尾義海

一九六九『ヨーガ根本聖典』『世界の名著1』中央公論社

山本和彦

二〇一五『インド新論理学における解脱論』法藏館

鎧淳訳

一九九八『完訳バガヴァッド・ギーター』中公文庫

Baba, G.

1976. *The Yogasūtra of Patañjali*, New Delhi: Motilal Banarsidass.

Krishnan, B.

1996. *The Yogamanībrāh̥ of Rāmānandāśraṣavati with the Gloss Svataniketa*, Delhi: Nag Publisher.

Rukmani, T. S.

1981. *Yogavārttika of Viñānabhikṣu*, New Delhi: Mushiram Manoharlal.

2001. *Yogasūtrabhāṣyaṇṇaṇa of Śaṅkara*, New Delhi: Mushiram Manoharlal.

Tachikawa, M.

2001. "The Introductory Part of Kīranāvali." *Journal of Indian Philosophy* 29: 275-291.

Woods, J. H.

1914. *The Yoga-System of Patañjali*, HOS 17, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.